

「ウソブク」考

長 沼 英 二

考察の目的 発話行為を表す古代国語の動詞には、発話内容の伝達を目的とする動詞と発話内容の伝達を目的としない動詞とが存在する——この仮説を検証するための基礎作業として、古代国語の発語行為を表す動詞の意味を探ってみたい。その作業の初めとして、後者に属すると考える「ウソブク」を採り上げる⁽¹⁾。

古代語「ウソブク」を一般的な辞書で検索すると、「息を長く吐く／歌を口ずさむ／動物などが吼える／風景などを嘆賞したため息をつく」といった用法が、だいたい共通して見られる。このうち「風景などを嘆賞して息をつく」は、中世以降の用法と考えられ、日葡辞書に見られるものである。

ところで、『大言海』（富山房）と『大辞典』（平凡社）とは、「そらうそぶく」の略として、「そらとぼける」の用法を認めるが、用例を挙げない。また、『日本国語大辞典』（小学館）は「そらうそぶく」の略とせず、「そらとぼける」の用法を認める。用例は更級日記である。つまり、古代後期の「ウソブク」に「そらとぼける」の用法を認めるのである。この見解を踏襲するものに岡田博子（一九九六）がある。しかし、古代語の「ウソブク」に、呼気・発声・発語を伴わない用法が存在するという見解には疑義を呈して、先に進むことにする。

非言語の例 非言語を発する（呼気・発声）「ウソブク」の用法は、平安時代中期頃に見られる。

「資料一」仲忠の朝臣はうけたまはり得る心ありて、水のほとり、草のわたりにありきて、多くの螢を捕へて、朝服の袖に包みて持て参りて、暗き所に立ちて、この螢を包みながらうそぶく時に、上いとく御覧じつけて、直衣の御袖に移取りて、包み隠して持て参り給ひて、(宇津保物語・初秋)

「資料二」内侍のかみに候ひ給ふ几帳の帷子をうちかけ給うて、物などのたまふに、内侍の督の程近きにこの螢をさしよせて、包みながらうそぶき給へば、さる薄物の御直衣にそこら包まれたれば、残る所なく見ゆる時に、(宇津保物語・初秋)

資料一と資料二とは、原田芳起(一九六九)によれば、螢を光らせるために息を吹きかける事例であつて、口笛を吹く用例ではないという。資料七について、河野多麻(一九六二)は、「誰に言うともなく小声で口ずさむ」とし、野口元大(一九八六)は、「口笛を吹いて合図をする」とする。つまり、資料二については、呼気・口笛・独語の三種の見解が提出されている。

独語と口笛 「ウソブク」内容が明確でないために、発語を伴う用法か、呼気・発声の用法か判断しがたい事例がある。呼気・発声の場合は、「口笛を吹く」という用法となろう。阪倉篤義(一九六六)は、口笛を吹く用法として、竹取物語などを指摘する。しかし、ここでは、とりあえず発語を伴う事例に分類した。この事例を資料三から資料七までに示す。

「資料三」あるいはは笛を吹き、あるいはは歌をうたひ、あるいはは唱歌をし、あるひはうそぶき、扇を鳴らしなどするに、(竹取物語)

資料三は、五人の貴公子がかぐや姫に求婚しに赴く場面である。この事例は、来訪を家人に知らせる働きを有するものであるけれども、発語内容を伝達する意図が存在する事例ではない。咳払いによる合図に比すことができる事例である。

〔資料四〕師走のもちごろ、月いとあかきに、物語しけるを、人見て、「誰ぞ。あな、すさまじ。師走の月夜ともあるかな」と言ひければ、「春を待つ冬のかぎりと思ふにはかの月しもぞあはれなりける」返し、「年をへて思ふもあかじこの月はみそかの人やあはれと思はむ」かく言ふ程に、夜ふけにければ、「人うたて見んもの」とて、入りにけり。男は、曹司にとみにも入らで、うそぶきありきけり。(篁物語)

資料四は、女と和歌を詠み交わした男が、女が奥に入ってしまった後に、「ウソブク」事例である。この場合、結果的に、「ウソブク」声が女に聞こえる可能性が存在するけれども、独りになった男が「ウソブク」のであるから、発話内容の伝達を目的としない事例と判断する。

〔資料五〕夕かけて、みな帰りたまふほど、花はみな散り乱れ、霞たどたどしきに、大臣、昔思し出でて、なまめかしううそぶきながめたまふ。宰相もあはれなる夕のけしきに、いとどうちしめりて、「雨気あり」と人々の騒ぐに、なほながめ入りてゐたまへり。(源氏物語・藤裏葉)

資料五は、故大宮(内大臣母)の一周忌を終え、出席者が皆帰る時に、内大臣が「ウソブク」事例である。近くには、宰相中将(夕霧)がいるので、宰相中将に対する発話内容の伝達を目的とする行為とも思われる。しかし、内大臣の「ウソブク」行為に対して、夕霧は「あはれなる夕のけしきに、いとどうちしめりて」という様子を示すけれども、応答しない。故大宮を偲ぶ心情は、内大臣と夕霧と共通する(夕霧は故大宮に養育された)から、内大臣の「ウソブク」に、結果として夕霧が感応したと考える。発話内容の伝達を目的としない事例と見ておく。

〔資料六〕月のあかき夜、大納言のうそぶき詠めありき給ついでに、さこそ侍れ、「人の気はひやする」などは、思しもやすらん、たちどまりなどし給を、「格子はなちて入れ奉る」と、とりなし侍べし。(夜の寢覚)

資料六は、宰相中将の会話表現中の事例である。懸想相手の中君の部屋の付近を徘徊する大納言が、「ウソブク」事例である。中君付き女房などの気配を求めて、「ウソブク」のであるから、自己の存在を知らせるためと考えられる。

独語することと自ずと存在を察知せしめる行為である。あからさまな呼び掛けと相違するもので、発話内容の伝達を目的としない事例とならう。

〔資料七〕其人、月ノ明リケル夜、大学寮ノ西ノ門ヨリ出テ、礼ノ植⁽²⁾ノ上ニ立テ北様ヲ見ケレバ、朱雀門ノ上ノ層ニ、冠ニテ襖着スル人ノ、長ハ上ノ垂木近ク有ルガ、吹(ウソフキ)ヲシ、文ヲ頌シテ廻ルナム有ケル。長谷雄、此ヲ見テ、「我レ此レ、靈人ヲ見ル」、身乍ラモ止事无クナム思ケル。(今昔物語集二四一一)

資料七は、朱雀門の上層に出現した怪異が「ウソブキ」をする事例である。これを、紀長谷雄は靈人と解釈するが、資料一と類似するもので、怪異が「ウソブキ」をして、紀長谷雄に対して発話内容の伝達を試みたものではない。紀長谷雄は観察者にすぎないからである。

以上検討したかぎりにおいて、「ウソブク」行為は、独りでいるときに行われる行為であり、あるいは同席者に聞かせることを前提としない行為である。

他者に存在を知らせるために行われる場合では、受け手を特定して行われる呼び掛けに比較して、結果として聞き取らせるといった偶発性を建前とする行為である。男性が愛人宅を訪ねるときに、「ウソブク」ことで来訪を知らせるのは、その声を当事者以外に聞き咎められた場合に、偶発的な出来事として追求を避けるためであろう。呼び掛けの場合、偶発的な出来事とする弁解は、通用しがたいであろう。

発語の事例 発語を伴う「ウソブク」は、独り言である。独語は、断るまでもなく、他者への発話内容の伝達を意図するものではない。心中思惟を発話したものである。

しかし、他者の同席する場所での独語は、他者に聞き取られる可能性が存する。そこで、独語を意図的に他者に聞き取らせることで、結果として、発話内容の伝達の達成を企図することがある。これは結果的な達成であって、「ウソブク」行為は発話内容の伝達を目的としない行為とする予想に、抵触するものではない。

さて、発話内容の明確な事例を、資料八から資料一七に示す。

〔資料八〕夜明け方近く、かたみにうち出でたまふことなく、背き背きに嘆き明かして、朝霧の晴れ間も待たず、例の、文をぞ急ぎ書きたまふ。いと心づきなしと思せど、ありしやうにも奪ひたまはず。いとこまやかに書きて、うち置きてうそぶきたまふ。忍びたまへど、漏りて聞きつけらる。「いつとかはおどろかすべき明けぬ夜の夢さめてとか言ひしひとこと／上より落つる」とや書いたまへらむ、おし包みて、なごりも「いかでよからむ」など口ずさびたまへり。(源氏物語・夕霧)

資料八は、落葉の宮に恋心を募らせる夕霧が、同室にいる妻雲居雁に気兼ねしつつも、落葉の宮へ手紙を書き、その文面を「ウソブク」場面である。「忍びたまへど、漏りて聞きつけらる」という表現から、ここの「ウソブク」行為が、雲居雁に聞かせることを意図したものでないと判断する。つまり、明け方で、まだ就寝中と思っていた妻に、不注意にも聞かれてしまったという場面になる。

〔資料九〕二月になれば、花の木どもの盛りになるも、まだしきも、梢をかしう霞みわたれるに、かの御形見の紅梅に鶯のはなやかに鳴き出でたれば、立ち出て御覧ず。「植ゑて見し花のあるじもなき宿に知らず顔にて来るるうぐひす」と、うそぶき歩かせたまふ。(源氏物語・幻)

資料九は、紫の上の形見の紅梅に鳴く鶯を見て、光君が「植ゑて見し」の歌を「ウソブク」。この時、光君は紫の上の服喪の期間で、人との対面を避けていた。この場面においても、他者は同席していないと思われるから、光君の「ウソブク」行為は、発話内容の伝達を意図したものとは考えられない。

〔資料一〇〕「文作らせたまふべき心まうけに、博士などもさぶらひけり。黄昏時に、御舟さし寄せて遊びつつ文作りたまふ。紅葉を薄く濃くかざして、海仙楽といふものを吹きて、おのおの心ゆきたる気色なるに、宮は、あふみに海の心地して、をちかた人の恨みいかにとのみ御心そらなり。時につけたる題出だして、うそぶき誦じあへ

り。(源氏物語・総角)

資料一〇は、紅葉狩において、文章博士たちが出題に応じて、自作の漢詩を「うそぶき誦じ」あう。「あふ」という動詞から、文章博士同士が、発話内容の伝達を目的としているように考えられるけれども、「うそぶき、誦じあへり」というように、読点を入れて理解すべきところと考える。つまり、自作の漢詩の一部あるいは全部を朗唱して、リズムなどを確認し、また互いに吟詠しあつて推敲を重ねるさまを、表現するものと見たい。「ウソブク」内容は、同席者の耳に入ることになるが、それは「ウソブク」結果なのである。したがって、この「ウソブク」行為も、他の文章博士に聞かせることを目的とする行為ではないのである。

「資料一一」うらめしげに、とばかり月をながめいりて、「年月をへだててだにもある物を今夜をさへやなげきあかさん」と、なまめかしくうちうそぶきて返給ふなるも、さすがに耳とゞまりて、そののち、やがてまどろまれず。(夜の寢覚)

資料一一は、主人公内大臣が、懸想相手の寢覚上の拒絶にあつて逢えず、帰るときに、「年月を」の歌を「ウソブク」場面である。この「ウソブク」行為は、寢覚上に直接話しかけるものではない。その限りにおいて、やはり発話内容の伝達を目的としない発語である。ただし、室内にいる寢覚上に聞かせる意図を持った「ウソブク」行為でもある。逢えない悲しみを、寢覚上に、直接訴えるのではなく、「ウソブキ」で間接的に知らせるのである。少し拗ねた態度を見せたといえようか。

「資料一二」八月十日余日、中納言のおはするかうそうのまへの前裁、ことにおもしろく見渡せば、ゆふべ、故郷をおぼしいで、すだれを捲きあげて、つくづくとながめ臥し給へれば、人々もみな宮を思ひいで、さまざまま言ひあへる中に、こゝろばせある人、かくいふ、「虫の音も花の匂ひも風のをともし世の秋にかはらざりけり」といひ出でたる返事を、集りてうそぶくめれど、やゝ程経ぬれば、中納言うちほをえみ給て、「げにさること

なれど、おどされたる事ぞ多かる」との給はするも、すぐろにはづかし。(浜松中納言物語)

資料一二は、中国に渡航した中納言一行の一人が、日本の京を思いやって、「虫の音も」の歌を詠み、その返歌をしようとして、同席者達が「ウソブク」場面である。これは、資料一〇と同じで、同席者達がそれぞれに返歌を作るために、「ウソブク」ものであって、その行為は、相互の発話内容の伝達を意図したのではない。

「資料一三」夜いたく更けぬれば、みな寝入りぬるけはひを聞きて、「秋の野の千草の花によそへつゝなど色ごとに見るよしもがな」とうちうそぶきたれば、「あやし、たれが言ふぞ。おぼえなくこそ」と言へば、「人はたゞ今はいかゞあらむ。ぬえの鳴きつるにやあらむ。忌むなるものを」と言へば、はやりかなる声にて、「をかしくもいふかな。ぬえはいかでか、かくもうそぶかむ。いかにぞや。聞き給ひつや」ところどころ聞き知りてうち笑ふあり。(堤中納言物語・はなだの女御)

資料一三は、軽輩ではない好色者が懸想相手の里下がりを追って、その屋敷に忍び込み、様子を窺い、人々が寝静まるのを待って、「秋の野の」の歌を「ウソブク」場面である。「みな寝入りぬるけはひを聞きて」とあるから、好色者が「秋の野の」の歌を「ウソブ」いたのは、屋敷の人々に聞かせるためでないことは、明らかである。

「資料一四」夜いたく更けぬれば、みな寝入りぬるけはひを聞きて、「秋の野の千草の花によそへつゝなど色ごとに見るよしもがな」とうちうそぶきたれば、「あやし、たれが言ふぞ。おぼえなくこそ」と言へば、「人はたゞ今はいかゞあらむ。ぬえの鳴きつるにやあらむ。忌むなるものを」と言へば、はやりかなる声にて、「をかしくもいふかな。ぬえはいかでか、かくもうそぶかむ。いかにぞや。聞き給ひつや」ところどころ聞き知りてうち笑ふあり。(堤中納言物語・はなだの女御)

資料一四は、資料一三と同一の場面である。好色者の「ウソブキ」を鶴(トラツグミ)の鳴き声と解釈した女性に対して、別の女性が、鶴が歌を「ウソブク」かと反論する。資料一三の「ウソブク」を受けた表現で、この「ウソブ

ク」行為にも発話内容の伝達の意図を見ることはできない。あるいは、非言語の事例に加えるべきものかもしれない。「資料一五」琴の声もやみぬれば、「いざ、しるべしたまへ。まろはいとたどたどし」とて、ひき連れて、西の渡殿の前なる紅梅の木のもとに、梅が枝をうそぶきて立ち寄るけはひの花よりもしるくさとうち匂へれば、妻戸おし開けて、人々あづまをいとよく掻き合はせたり。(源氏物語・竹河)

資料一五は、好色者を気取った薫君が玉鬘邸を訪れ、琵琶や箏の琴の音を聞いて、催馬楽の「梅が枝」を「ウソブク」場面である。紅梅に優る薫君の芳香に、室内の演奏者達は妻戸を開けて、「ウソブキ」に合わせて弹奏する。つまり、「ウソブク」声によって、薫君の存在を察知したのではなくて、薫君の芳香によって、その訪問を推知したのである。とすれば、この「ウソブク」行為も、発話内容の伝達を意図したものではないといえよう。

「資料一六」昨夜の心知りの人々は、「いかなりつらん、いとらうたげなる御さまを。いみじうも思すとも、かひあるべきことかは。いとほし」と言へば、右近ぞ、「さもあらじ。かの御乳母の、ひき据ゑて、すずろに語り愁へし気色、もて離れてぞ言ひし。宮も、逢ひても逢はぬやうなる心ばへにこそうちうそぶき口ずさびたまひしか」。

(源氏物語・東屋)

資料一六は、女房右近が、浮舟に言い寄った後の匂宮の行為を「ウソブク」と表現する。「逢ひても逢はぬ」には、複数の引歌が指摘されている。資料八と同じように、「クチズサム」を伴う事例で、発話内容の伝達を目的としない発話と判断する。

「資料一七」三月二十日夜雨ふる。中宮大夫殿かぐらをうそぶき給ひて、「嘯々たる暗き雨の窓をうつこゑ」と口ずさみ給ふ。絵物がたりにかきたらんことをきくやうにておもしろし。(中務内侍日記)

資料一七は、状況の細部を明確にしがたい。雨夜の徒然の慰めに、中宮大夫が神楽を「ウソブク」声を、偶然に作者中務内侍が耳にした場面と考えたい。「ウソブク」行為と「クチズサム」行為とが共起する事例は、資料八と資料一

六とも見られた。そこで、この「ウソブク」も、発話内容の伝達を意図するものでないと見做しておく。

「ウソブク」対象を明確にしうる事例において、その対象は詩歌や歌謡に限られていた。そこで、発語を伴う「ウソブキ」は、旋律を持ったものと推測できようか。すなわち、諸辞書の記述するように、旋律を伴った独語行為を謂う場合（用法）が、「ウソブク」に存在すると考えるのである。

問題の検討 さて、先に見たように、『日本国語大辞典』や岡田（一九六六）などが、古代語の「ウソブク」に発声発語を伴わない用法、すなわち「とぼける」といった意味の存在を指摘する。そこで、古代語の「ウソブク」にそのような用法が存在するか否かを、検討したい。

資料一八から資料二〇までに、「とぼける」といった意味で用いられているか、と思われる事例を示す。

「資料一八」またの日も、まだしきに、「昨日は、うそぶかせたまふこと、しげかんめりしかば、えものきこえずなりにき。いまのあひだも、御暇あらばおはしませ。上のつらくおはしますこと、さらにいはむかたなし。さりとも、命はべらば、世の中は見たまへてむ。死なば、思ひくらべても、いかがあらむ。よしよしこれは忍びごと」とて、みづからはものせず。（蜻蛉日記）

資料一八は、岡田（一九九六）の指摘する事例である。道綱母の養女に求婚しつづける藤原遠度は、道綱宛書簡で、前日の道綱母邸の様子を、「ウソブク」という。遠度は、養女との結婚に快諾を得られず、道綱から説得しようとするのである。そのための前日の来訪も、道綱母邸の端午の節句の騒ぎに、目的を達せなかった旨を伝える書簡である。遠度が言い出せなかった原因は、「うそぶかせたまふこと、しげかんめり」にあった。とすれば、端午の節会の最中に、発声発語を伴う「ウソブク」行為が行われていたことを、否定するのは困難ではなからうか。さらに、「ウソブク」ことで、結果として遠度を無視する態度をとった（語用論的意味）と理解するのも、穿ちすぎではなからうか。資料一八は、用法においても、表現においても、語用論的意味においても、「とぼける／相手を無視する」の意味は存

在しないと考える。

「資料一九」そこにもなほしもこなたさまに渡りする者ども立ちこみたれば、舟のかぢとりたるをのこども、船を待つ人の数も知らぬに心おごりしたるけしきにて、袖をかいまくりて、顔にあてて、棹におしかかりて、とみに舟もよせず、うそぶいて見まはし、いといみじうすみたるさまなり。(更級日記)

資料一九は、『日本国語大辞典』が指摘する事例である。初瀬参詣の途次、宇治の渡りで船頭達が「ウソブク」場面である。船頭達の態度は、「心おごりしたるけしき」で、舟を船着き場に着けず、落ち着いている。この時の「ウソブク」行為は、発声発語を伴う行為であることは、明らかである。しかし、同時に、同じ行為が、乗船を待つ人々を無視する結果となっていることも、否定できない。つまり、「ウソブク」の用法においては、「詩歌などを口ずさむ」といった意味であるけれども、「ウソブク」行為は、「とぼける／相手を無視する」といった語用論的意味を担っている。したがって、資料一九は、古代語の「ウソブク」が、「とぼける／相手を無視する」といった語用論的意味を担って用いられた初出例となる。

「資料二〇」其ニテ「然ラバ下サセ給ヒネ。罷候ヒナム」ト云ヘドモ、尚不免シテ、被負乍ラ、月詠メウソ吹テ、時替マデ立テリ。(今昔物語集二三一一九)

資料二〇は、比叡山の僧侶実因が、強盗に背負われながら、持ち前の強力で屈服させ、京師内を連れ回す場面である。実因に脚で腹部を締め付けられ、赦免を懇願する強盗に対して、実因は「ウソブク」ばかりである。この「ウソブク」行為も、発声発語を伴う行為であると同時に、強盗の懇願を無視する結果となっている。この事例も、資料一九と同じように、「ウソブク」行為が、「とぼける／相手を無視する」といった語用論的意味を担って用いられた事例となる。

以上三例すべて、発声発語を伴わない「ウソブク」の事例と考えるべき根拠のないことを、確認し得たかと思う。

用法の分岐 古代語の「ウソブク」の意味特性は、発話内容の伝達を目的としない呼気・発声・発語の行為である。その用法に関して、古代前期にあつては、「息を吐く」という用法に限られていたと考えられる。そこから、古代後期になって、「詩歌などを口ずさむ」という用法が分岐した。この用法が分岐する中間段階に、「口笛を吹く」という用法が生まれた可能性がある。つまり、息を吐くという行為において、その息が単なる呼気であることから、音階や旋律などを持った呼気（口笛）であることへと分岐し、さらに、その音階や旋律などを持った呼気に言語が加わった呼気、すなわち詩歌の吟詠へと分岐が進んだと考えるのである。しかし、用法の分岐が進んでも、聞き手の存在を前提としない行為という意味特性は保持された。

このような意味特性を持つ古代語の「ウソブク」が、古代後期の更級日記と今昔物語集とにおいて、「とぼける／相手を無視する」といった語用論的意味を担うようになるのは、なぜであろうか。

発話内容の伝達を目的としない発声・発語行為は、同席者がいるときには、相手の存在を無視する行為になりうる。すなわち、本来、発声・発語が発話内容の伝達的手段であるとするならば、発声・発語行為が行われながら、同席者との発話内容の伝達を意図しないのは、同席者の存在を認めないことになる。要するに、「ウソブク」行為は、同席者のいるときには、相手の存在を無視する行為と受け取られる可能性を、有するのである。このような古代語の「ウソブク」の意味特性と現実の使用環境との関係が、前述の語用論的意味を、「ウソブク」に担わせた誘因と考える。

そこで、古代語「ウソブク」の意味特性を総括すれば、「発話内容の伝達を目的としない、呼気・発声・発語行為」となる。

藤原浩史（一九九七）は、古代語「ノノシル」に、一方的な発話という意味特徴のあることを指摘する。「ノノシル」は、自己の心情を、特定の聞き手を想定せずに、強烈に吐露する発話行為と考えるのである。

とすれば、「ウソブク」と「ノノシル」とは、発話内容の伝達を目的としない動詞という範疇に属しながら、発語行

為の強弱を基準とすれば、強烈な発語行為が「ノノシル」であり、隠微な発語行為が「ウソブク」であるといえようか。

註(1) 古代国語において、「ウソフク」であるか、「ウソブク」であるか不明であるが、「ウソブク」に統一して表記する。また、享和本新撰字鏡には「字曾牟久」が(天治本には「久」なし)、観智院本類聚名義抄には「ウソムク」が、日葡辞書には「Vsomuqu」があるけれども、「ウソムク」と「ウソブク」とに意味的差異はないものと見做し、同語として扱う。さらに、本稿では、漢字文献の用例を扱わない。それは、漢字表記のため、その訓が明確でないことによる。なお、日本書紀には「鳴嘯」が、万葉集には「嘯鳴」が、懐風藻と菅家文章とには「嘯」が見られる。

(2) 「礼ノ植」の「植」の字は、原文では、木偏に直の旁に作る。

〈参考文献〉

- 岡田博子(一九九六)「蜻蛉日記の表現特性―「うそぶく」を通して―」『二松学舎大学人文論叢』第五七輯
- 河野多麻(一九六一)『日本古典文学大系／宇津保物語／二』岩波書店
- 阪倉篤義(一九六六)『語構成の研究』角川書店
- 野口元大(一九八六)『校注古典叢書／宇津保物語／三』明治書院
- 藤原浩史(一九九七)「平安和文における「ののしる」の意味構造」加藤正信編『日本語の歴史地理構造』明治書院

〈引用本文〉

- ◇ 阪倉篤義校訂『岩波文庫／竹取物語』(一九七〇)
- ◇ 遠藤嘉基校注『日本古典文学大系／篁物語』(岩波書店一九六四)
- ◇ 原田芳起校注『角川文庫／宇津保物語／中』(一九六九)
- ◇ 阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳『日本古典文学全集／源氏物語／一一六』(小学館一九七〇―一九七六)
- ◇ 阪倉篤義校注『日本古典文学大系／夜の寝覚』(岩波書店一九六四)
- ◇ 松尾聰校注『日本古典文学大系／浜松中納言物語』(岩波書店一九六四)

「ウソブク」考

- ◇ 寺本直彦校注『日本古典文学大系／堤中納言物語』（岩波書店一九五七）
- ◇ 木村正中・伊牟田経久校注・訳『日本古典文学全集／蜻蛉日記』（小学館一九七三）
- ◇ 犬養廉校注・訳『日本古典文学全集／更級日記』（小学館一九七二）
- ◇ 小久保崇明編『水府明德会彰考館蔵本中務内侍日記―本文篇―』（新典社一九八三）
- ◇ 山田孝雄・山田忠雄・山田英雄・山田俊雄校注『日本古典文学大系／今昔物語集／四』（岩波書店一九六二）